

般若経における六波羅蜜説

妹 尾 匡 海

一 問題の所在

初期大乘仏教の諸経典を検討するとき、そこにはさまざまな思想、信仰の流れがあり、ひとつの思想についてもさまざまな受容と展開のあったことが認められる。初期大乘仏教経典に現れる六波羅蜜説も単一なものではなく、種類のもののあったことが確かめられるが、その流れをみると、

- (A) 六波羅蜜の各支を平等にみる立場
- (B) 般若波羅蜜のみを特に重視する立場

との二系統に分けることができると思われる。すなわち、(A)の系統に属する後漢代訳出の諸経典としては『阿闍世王經』『他真陀羅所問如來三昧經』『法鏡經』『成具光明定意經』等を挙げることができるが、これらの経典においては六種の波羅蜜行が菩薩の実踐道として平等にとりあげられており、六種の中のひとつの波羅蜜を選んで特に重視するということがない。すなわち、六波羅蜜の各支が並列的に立てられ、その実践が説かれるのである。

次に(B)の系統のものとしては、「般若波羅蜜」受持の信仰を強調し、この無自性空を内容とする般若波羅蜜を中

心軸として展開する六波羅蜜の実践を説く般若経經典群の名を挙げることができる。

この二系統の区分についてはすでに平川彰博士等によって指摘されている通りであるが、いずれの系統が六波羅蜜の源流的思想かという問題についてはさまざまな説が提出されており、今日まで決着をみていないといつてよい。すなわち、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若の六種の波羅蜜の中から般若波羅蜜の優位性が認められ、然るのちに般若経に説かれる般若波羅蜜として発展した、あるいはまず最初に般若波羅蜜が出現し、その般若波羅蜜の展開として他の五種の波羅蜜が順次立てられていったという二つの学説が対立しているといつてよいと思われる。^②

拙稿は、般若経における六波羅蜜説について考察することを目的としているが、このテーマ自体がすでに六波羅蜜説の源流に関する問題を含んでいると思われる。般若経においては、般若波羅蜜を六波羅蜜の組織の根元的中心として据えているのであるが、この場合、般若波羅蜜以外の五波羅蜜を肯定的方向に位置付けているのか、それともむしろ否定的方向に位置付けているのかという問題は、六波羅蜜説の源流に関する考察にとって重要な示唆を与えるものであるからである。般若経においてはその方向は単一なものでなく、複数の思想が混在しているといつてよいであろう。したがって、基本的にはどちらの方向に向かっているかという考察がなされねばならず、その場合、テキストの発達段階の問題が充分に考慮されねばならぬであろう。

また、従来の般若経研究においては、六波羅蜜の体系を無自性空という般若波羅蜜の立場からのみ考察する傾向が強いと思われるが、拙稿はあくまでも実践道としての六波羅蜜が般若経においてどのように位置付けられているかという観点から、般若経そのものの発達を踏まえつゝ、そこに現れる六波羅蜜説の変遷乃至発達を考察してゆきたい考えである。

二 小品系の六波羅蜜説について

I

般若経經典群、すなわち大般若経十六会のうち雜部般若経を除いた初会から五会にいたる般若経の中で、四会及び五会が小品系としてまとめられている。

この小品系般若経には各時代の異訳があり、これらの諸異訳を比較検討してみると梵本の内容自体に変化のあったことが知られるのである。^③

また、八千頌般若経梵本にみられる増広の形式、すなわち繰り返しや法数の羅列などの形式が、小品系般若経たる二万五千頌、一万八千頌梵本と差異の認められない部分が出てくることから、小品系の内容を指摘する場合にはその最古訳である『道行般若経』の内容を検討する必要がある。こうした点から、般若経における六波羅蜜説を考察する場合もこの『道行般若経』を根本的な資料として見てゆかねばならぬであろう。

現在の『道行般若経』三十品の成立については種々の説があるが、それらを総合して一応の基準を示すと、およそ次の三期の発展段階を経て成立したものと考えられる。^④

第一期 「道行品」及び「難問品」に相当する基本的なテキストの成立。

第二期 第一期テキストに、「功德品第三」から「累教品第二十五」までが追加増広。

第三期 第二期までのテキストに、「不可盡品第二十六」から「嘱累品第三十」までが追加され、現存の『道行般若経』が成立。

今、これを一応の基準としながら『道行般若経』に現れる六波羅蜜について検討するとき、この六波羅蜜の説が

『道行般若經』の三期の発達段階にともなつて次のごとく変化していることが確認される。

すなわち、一般に「原始般若經」と呼称される基本的な般若經にその一部が相当すると見做されている「道行品第一」は、「第一期テキスト」として『道行般若經』の中でもっとも早く成立したものである^⑤。

この「道行品」を見たとき、般若波羅蜜の意義乃至功德等が圧倒的とも言ひうる多彩な表現をともなつて端的にかつ鮮明に示されるのに対して、六波羅蜜の語はこれをどこにもみいだすことができないのである。初期大乘仏教を特色づける語句の重要なものが多く盛り込まれているとされる「道行品」において、このことは注意されてよいと考えられる。

さらに、「難問品第二」においても六波羅蜜の語は現れないのであり、般若經の原型を含んでいるとみられる「道行品」「難問品」の二品は、六波羅蜜についてまったく沈黙しているのである。

六波羅蜜の語が『道行般若經』に現れてくるのは、「第二期テキスト」の増補部分、すなわち「功德品第三」から「累教品第二十五」にいたる二十三品の段階においてであるが、この二十三品の前半部分と後半部分との間で六波羅蜜の記述内容に変化のあることを指摘しておく必要がある。

すなわち、般若經における六波羅蜜説の際立った特徴であるところの、般若波羅蜜が他の五種の波羅蜜のすべてを摂するという表現は、この二十三品の前半部分、すなわち「功德品第三」から「本無品第十四」の間に特に集中して現れるのである。

『道行般若經』において六波羅蜜の語が最初に現れるのは、この前半部分の冒頭「功德品第三」においてであるが、その内容は、

般若波羅蜜を受く者は悉く六波羅蜜を受く。このごとく拘翼よ、般若波羅蜜を受く者は悉く六波羅蜜を受くと

為す。^⑥

というものであって、六波羅蜜の内容についてはなにも説明されず、たゞ、般若波羅蜜が六波羅蜜を代表し、他の五波羅蜜を統轄するものであるということだけが唐突に宣言されるのである。続いて六波羅蜜の各支が「功德品」の後半において示されるが、その内容は、

阿難、仏に白して言さく。檀波羅蜜を説く有るなく、また、尸波羅蜜を説かず、また惟逮波羅蜜を説かず、また禪波羅蜜を説かず、また是の名を説く有るなく、但だ共に般若波羅蜜を説く。何をもつての故に。仏、阿難に語りたもう。般若波羅蜜は五波羅蜜中において最尊なり、と。^⑦

というものであり、五波羅蜜の立場からいうならば、五波羅蜜は否定的な方向において示されるのである。

このような表現を見ると、『道行般若經』が般若波羅蜜以外の各波羅蜜を積極的な立場から説く意志のなかったことが窺われるのであるが、それと同時に、この表現は般若經の「第二期テキスト」成立以前に六波羅蜜説が般若經以外の場所で一般化していたことを前提とするものであると思われる。もし、六波羅蜜が般若經の系統から説き出され体系化された思想であるとするならば、六波羅蜜について何の説明も行なわず冒頭に否定的字句を連ねることはあり得ないからである。また、同じ「功德品」において、

持戒し、忍辱し、精進し、一心し、諸經を分布し人に教うるとも、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるには及ばず。^⑧

とも表現されており、般若經においては般若波羅蜜を強調する場合、このように般若波羅蜜以外の各波羅蜜を劣等なものとして位置付けることによって般若波羅蜜自体を高めるという方法が多く用いられるのである。

般若波羅蜜と他の五波羅蜜との関係をもつとも端的に表現している記述としては、

般若波羅蜜は五波羅蜜中最尊なり。譬うれば極大地の如し。種はの中に散じて同時に俱に出て大株を生む。是の如く阿難よ、般若波羅蜜は是れ地なり、五波羅蜜は是れ種にしてその中より生ず。薩芸若は般若波羅蜜より成ず。是の如く阿難よ、般若波羅蜜は五波羅蜜中極大尊にして教うる所、自在なり⁹。

を挙げることができるが、これらの記述を見ると、般若波羅蜜が、布施、持戒、忍辱、精進、禪定の各波羅蜜中に内在する統一原理乃至指導原理であるとされていることは明らかである。そして、『道行般若經』において

般若波羅蜜は即ち五波羅蜜の護りなり。般若波羅蜜は是れを護り、五波羅蜜の各の名字を得せしめん¹⁰。

と説かれていることは、五種の徳目を波羅蜜たらしめるものが般若波羅蜜であるということの意味し、それはすなわち波羅蜜がそのまゝ般若波羅蜜に他ならないと理解されるのである。

般若波羅蜜を六波羅蜜の中心に置く般若經の思想はこゝにおいて「波羅蜜思想」として展開しており、その思想的完成を認めることができると思われる。

ところが、二十三品の後半部分、すなわち「阿惟越致品第十五」以降に現れる六波羅蜜の記述内容を検討するとき、それが前半部分と微妙に違ってきていることが確認されるのである。すなわち、般若波羅蜜のみを重視する前半部分に対して、後半部分ではそれと同時に六波羅蜜自体をも積極的に説き示すという姿勢が現れてくるのである。「善知識品第十九」では須菩提が菩薩摩訶薩の善知識について仏に問うのであるが、これに対して仏は菩薩の善知識として、仏・般若波羅蜜・六波羅蜜の三を挙げている。この六波羅蜜に関する部分を見ると、

六波羅蜜、是れ菩薩摩訶薩の善知識なり。当に是れを知るべし。六波羅蜜は是れ舍怙羅なり。六波羅蜜は是れ道なり。六波羅蜜は是れ護りなり。（中略）過去の怛薩阿竭阿羅訶三耶三仏は皆、六波羅蜜より生ず。甫当来

の怛薩阿竭阿羅訶三耶三仏は皆、六波羅蜜より生ず。今現在十方阿僧祇刹の怛薩阿竭阿羅訶三耶三仏は皆六波

羅蜜より生ず。^⑪

と説かれており、また、「累教品第二十五」には次のごとく説かれている。

菩薩は仏道を得んとほつすれば、当に六波羅蜜を学ぶべし。何をもつての故に。六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の母なり。^⑫

このように、二十三品の後半部分においては六波羅蜜に関する記述が肯定的な表現へと変化していることが知られるのである。勿論、般若波羅蜜が六波羅蜜にその位置を取ってかわられるというのではない。後半部分においても般若波羅蜜は重視されるのであり、

菩薩が般若波羅蜜を学ぶ時、諸波羅蜜は皆悉く属す。^⑬

といった表現はこれを諸所にみいだすことができるのである。であるから般若波羅蜜の優位性はあくまでも維持されているわけである。しかし、それと同時に後半部分の特色として六波羅蜜そのものが菩薩道として説き示され強調されていることもまた見逃しにできぬ事実であろう。すなわち、「第二期テキスト」で増補された二十三品の前半部分では般若波羅蜜以外の五波羅蜜が否定的な方向でのみ説かれるのに対して、後半部分ではそれらが肯定的な立場から説かれていると言いうると思われる。

Ⅱ

次に、『道行般若経』における布施、持戒、忍辱、精進、禪定の各波羅蜜のとりあげ方を検討することによって、さきに述べた後半部分の「肯定」の内容について考察しておく必要があると思われる。

拙稿が繰り返し返して指摘しているごとく、『道行般若経』では般若波羅蜜以外の各波羅蜜についてこれを特にとりあげて説くところはほとんどないといつてよいのである。しかしながら、それらに関する記述を僅かでも求めてみ

ると、それがこの「第二期テキスト」増補部分の後半、すなわち「阿惟越致品第十五」から「累教品第二十五」までの間に集中していることが知られるのである。

初期大乘仏教における戒波羅蜜の内容は十善道であるが、『道行般若經』では「阿惟越致品」において十善道が説かれている。しかし『道行般若經』ではこの「阿惟越致品」で十善道が示されながらも、それが戒波羅蜜の内容であることを明示する語をみいだすことができないのである。戒波羅蜜が具体的に十善道を指すことを明確に述べるのは大品系般若經の系統においてである。小品系たる『道行般若經』では十善道と戒波羅蜜とが明確には結合されておらず、また、「阿惟越致品」以外の個所においても戒波羅蜜の内容を示すところはないのである。

次に、『道行般若經』が布施波羅蜜及び忍辱波羅蜜について触れるのは「恒竭優婆夷品第十六」においてである。菩薩は大劇難たる虎狼中に至る時、終に畏怖なし。心に念言すべし。設え我れを啖食する者有るも、当に布施を行じ檀波羅蜜をなして阿耨多羅三耶三菩に近づかん。願わくば我れ後に作仏せんとする時、我が刹中に禽獸道なからしめん。菩薩は賊中に至る時、終に怖懼なし。心に念言すべし。正に我れ賊に殺されしむ所となりても當に我れ瞋恚あることなし。忍辱を具して驢提波羅蜜を行じ、阿惟三仏に近づくべし。願わくば我れ後に仏を得ん時、我が刹中に盜賊あることなからしめん^⑭。

と説かれてるのがそれであるが、こゝで注意すべきことは、この「恒竭優婆夷品」が浄土教關係の面から注目されているごとく菩薩の誓願について説くことを主題としていることである。

こゝに説かれる菩薩の誓願は五項目から成っているが、その内容を要約すれば次のごとくである。

- (1) 我れ仏となりて後、我が刹中に禽獸道なからしめん。(無禽獸道)
- (2) 我れ仏となりて後、我が刹中に盜賊あることなからしめん。(無有盜賊)

(3) 我れ阿惟三仏を得て後、我が刹中皆水漿あらしめ、我が刹中の人悉く薩芸若八味水を得せしめん。(八味浴地)

(4) 我れ精進して阿惟三仏を得る時、我が刹中ついに穀の貴きことなからしめ、我が刹中の人、願う所、飲食を求むる所、悉く前にあらしめん。(飲食自然)

(5) 精進を行じ阿惟三仏を得て、我が刹中に悪歳疾疫者あることなからしめん。(無有疾疫)

すなわちこの誓願説において、布施波羅蜜は「無禽獸道」と対応し、忍辱波羅蜜は「無有盜賊」と対応しており、精進は「飲食自然」及び「無有疾疫」と対応して示されているのである。^⑮

この誓願説については、望月信亨博士が「浄土教の起源及発達」において論じられているが、最近、この般若経の誓願説が般若経自体からではなく、『阿闍仏国経』との関連から導き出されて来たものとみる意見が提出されている。すなわち、『阿闍仏国経』に説かれる菩薩の誓願と『道行般若経』に示される菩薩の誓願とは一致しており、これについて、『阿経』における記述の前語関係及び『道行般若経』から『仏母般若経』に至る小品系般若経内における五願の発達という観点から検討してみた結果において、小品系般若経における五つの誓願説が『阿闍仏国経』の中から導き出されたものであるとする説がそれである。^⑯

『阿闍仏国経』においてはとくに忍辱波羅蜜が重視されており、阿闍仏自体が忍辱波羅蜜を神格化したものと見做されているが、一方、『道行般若経』が、五願について述べる個所以外に忍辱波羅蜜について述べるところがない点からみて、またさらにこの『道行般若経』の五願の記述が『阿闍仏国経』から導びき出されたものであるとするならば、『道行般若経』自体としては、忍辱波羅蜜を積極的に説く意志はなかったとみななければならぬであろう。すなわち、『道行般若経』においては、誓願説の導入にともなうて忍辱波羅蜜に関する記述も導入されたとみら

れるのであり、『道行般若經』自体は忍辱波羅蜜について何も語っていないに等しいと思われる。

Ⅲ

以上の諸点をあらためて考察すると次のごとくである。

まず、初期の菩薩の波羅蜜行にはさまざまな流れがあり、その中で複数の思想が成長しつゝあったと思われる。たとえば、説一切有部の『大毘婆沙論』に、施、戒、精進、般若の四波羅蜜が説かれているが、論ではそれに忍と静慮を加えた外国師の六波羅蜜説に触れ、さらに前の四波羅蜜に聞と忍を加えた別説をも紹介しているのである。^⑩

また南伝系統においては三波羅蜜、十波羅蜜、三十波羅蜜等の種々の波羅蜜説が説かれているが、この南伝の波羅蜜説と北伝の波羅蜜説とはその内容も修行の期間も異っており、両者の間に関連性のなかったことは明らかであると思われる。^⑪

このように波羅蜜説の系譜は混沌としていると言いつるが、そのような複数の流れのなかにおいて六波羅蜜説と般若波羅蜜説の二説がともに有力な思想として成長していったと思われるのである。すなわち、六波羅蜜の中から般若波羅蜜が選出されたのではなく、また、般若波羅蜜から他の波羅蜜が立てられ六波羅蜜としてまとめられたのではなく、それ以前の混沌とした段階から一主流として六波羅蜜説が構想され、また、別の一主流として単一の般若波羅蜜説が構想され、ともに成長しつゝあったと思われる。

般若經の「基本テキスト」に相当するとみられる『道行般若經』の「道行品」「難問品」が六波羅蜜について何も述べていないのは、「基本テキスト」がこのような段階において構想されたことを背景とするとと思われるのである。

このような例は、大乘仏教の最初期に成立したといわれる『金剛般若經』にもみられるのであり、この經典では

般若波羅蜜と忍辱波羅蜜のみが説かれ、他の波羅蜜はまったく現れないのである。

このことについて、静谷正雄氏は、菩薩の行が六波羅蜜として一般化される以前の段階で『金剛般若經』が成立した可能性を示すものと見ておられる^⑧。

『道行般若經』の「基本テキスト」を『金剛般若經』の場合と同列に論じることができないが、やはりそれに似た段階の状況において『道行般若經』の「基本テキスト」は成立したものと思われるのである。

次に、「第二期テキスト」の増補段階に至って俄に、布施、持戒、忍辱、精進、禪定の五波羅蜜との対比のもとに般若波羅蜜の優位性が主張されるのであるが、それは『道行般若經』の「基本テキスト」それ自体から発達したものと考えるがたいと思われる。

この、『道行般若經』の「第二期テキスト」が『阿闍世經』の影響を受けていることについては干潟竜祥博士等の研究によってもほぼ明らかであるが、この『阿闍世經』の六波羅蜜説には般若波羅蜜のみを特に重視する思想は見られず、六波羅蜜の各支は平等に説かれているのである。また、『阿闍世經』以外の大乗諸經典にも般若波羅蜜を特に重視せず、六波羅蜜を平等に立て、説くものが多く存することから、当時、菩薩の実踐道として六波羅蜜を平等に説く思想が一般化していたであろうことが推察されるのである。

そうした点から、般若經が般若波羅蜜を説く場合、他の波羅蜜よりも般若波羅蜜が優位にあるということを繰り返し強調し、それを理論化する必要があったと考えられるのである。

さらに六波羅蜜は大乗菩薩の実踐道であるという観点から、その実践内容は具体的に示されねばならぬ必要があったはずであり、事実、初期大乗の諸經典が六波羅蜜各支の内容について明示しているのである。一方、これに対して『道行般若經』はすでに指摘したごとく、六波羅蜜の実踐を具体的に説示する經典ではない。六波羅蜜の語は

列挙されるが、『道行般若經』には六波羅蜜の実践に関する記述がまったく欠如しているのである。こうした点からも『道行般若經』は六波羅蜜を積極的に説く意志がなかったと考えざるを得ないであろう。

次に、この「第二期テキスト」の増補部分の後半、すなわち「阿惟越致品第十五」以降の品では六波羅蜜そのものが説示されてくるのであり、その意味において、前半部分と一線を画すものであるとみななければならない。すなわち、般若波羅蜜以外の五波羅蜜が「否定」の方向から「肯定」の方向へと転換して示されるのである。

この後半部分がどのような背景のもとに構想されたのか『道行般若經』自体からは窺いえないのであるが、たゞ、すでに述べたごとくこの場合やはり『阿閼仏国經』等に表示される六波羅蜜説の影響のもとで構想されたものと思われる。

三 大品系の六波羅蜜説について

I

大品系般若經はおよそ次のような発展段階を経て成立したものとみられている。

すなわち、般若經の根本たる「基本テキスト」が『阿閼仏国經』等の影響のもとに「第二期テキスト」へと発展し、これにジャータカの「常啼菩薩本生」等が取り入れられて現存の小品系たる『道行般若經』の原型が作られたのであるが、この時に大品系般若經の原型も成立したものとみられているのである。

すなわち、大品系般若經の「基本テキスト」は、般若經の「第二期テキスト」及び「第三期テキスト」すなわち後に小品系の基本となる『道行般若經』の原型テキスト、それにその他の数種の大乗的な教義の三者の影響を受けて構想され、これがさらに現存の『放光般若經』として発達成立したものとみられているのである。^②

大品系般若経は、小品系般若経を先とし、それを土台として作られていったとされるのであるが、形式の面からは次のような相異が指摘されている。^③

(1) 大品類は小品類の最初の一品を二十数品に増大した点。

(2) 大品類は小品類の終りから第三品の前に約二十品を加えた点。

すなわち、この二点にのみ大品系と小品系との相異が認められるのであり、その他の部分は増広や思想の発展などは見られるにしても、説かれる主題や順序は一致しているのである。

大品系般若経の「基本テキスト」の成立を促したのは、般若経の「第二期テキスト」であるが、これは『道行般若経』では「功德品第三」から「累教品第二十五」までの間に相当するものである。これをさらに二分して「功德品第三」から「本無品第十四」までに示される六波羅蜜と、「阿惟越致品第十五」から「累教品第二十五」までに示される六波羅蜜とではその説く方向が変化しており、これについては前章において考察した通りである。

すなわち、一方的に般若波羅蜜のみを強調して説く前半部分に対して後半部分では、この般若波羅蜜を含む六波羅蜜それ自体を重視する傾向を見せてくるのであるが、この『道行般若経』の「阿惟越致品」以降「累教品」までの六波羅蜜と、大品系たる『放光般若経』の六波羅蜜説を対比するとその六波羅蜜の位置付けが合致していることが明らかである。

「放光品第一」では最初に世尊が数億百千の光明を放ち、その一々の光明が千葉の金色の宝華に交じり、華々の上に仏が座して六波羅蜜を説くさまが描写され、六波羅蜜の各支の相が示されている。^④

「大乘とは何か」ということについて述べる「摩訶衍品第十九」は大乗仏教全体からも極めて重要な品であるがその最初に「六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の大乗なり」と示して、まず六波羅蜜が菩薩の修すべき大乗であると説き、

その内容を示している。すなわち、

須菩提、仏に白して言さく。何をか菩薩の檀波羅蜜と為すや。仏、告げて言さく。菩薩摩訶薩の布施は薩云若に應じて内外の有る所を布施す。是の功徳をもって、衆生に施をつくし、衆生と共に阿耨多羅三耶三菩を發す。是れを菩薩摩訶薩の檀波羅蜜と為す。須菩提、仏に白して言さく。何をか尸波羅蜜と為すや。仏、言さく。菩薩は持戒して薩云若に應ずる意を發し、自ら十善を持し他人にも十善を行ずるを教えて倚う所なし。是の為に菩薩は不批戒にして倚う所なし。須菩提、仏に白して言さく。何をか驢波羅蜜と為すや。仏、言さく。菩薩は自ら忍地を具足し、復た他人に勸めて忍辱を行ぜしめ倚う所なし。是れを菩薩摩訶薩の驢波羅蜜を行ずると為す。須菩提、仏に白して言さく。何をか惟逮波羅蜜と為すや。仏、言さく。菩薩は薩云若に應ずる意をもって五波羅蜜を廢せず。復た衆生を五波羅蜜に立て、倚う所なし。是れを菩薩の惟逮波羅蜜と為す。須菩提、仏に白して言さく。何をか禪波羅蜜と為すや。仏、言さく。菩薩摩訶薩は薩云若の意をもって自ら漚瑟拘羅をもち諸禪に入つて禪生に随わず。復た他人に教えて禪を行ぜしめ倚う所なし。是れを菩薩の禪波羅蜜と為す。須菩提、仏に白して言さく。何をか菩薩の般若波羅蜜と為すや。仏、言さく。菩薩摩訶薩は薩云若の意をもって諸法に入らずして諸法の性を觀じ倚う所なし。復た他人に教えて諸法に入らずして諸法の性を觀ぜしめ倚う所なし。是れを菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と為す。^⑧

このように小品系では明示されることのなかつた六波羅蜜の各支の相が小品系では悉く示されるのである。すなわち、戒波羅蜜の内容が十善を指し、また、精進波羅蜜が六波羅蜜を行するための推進的原理として把握されるところは、小品系たる『放光般若經』の出現によって初めて明らかにされるのである。

とくに布施波羅蜜については、布施波羅蜜が施者も受者も施物ともに空であるという認識に立ついわゆる「三

輪空寂」「三輪清淨」の布施を指すことは、小品系において初めて説示されるのである。これについて「問觀品第二十七」では言葉をかえて次のごとく説明されている。

有我想、有彼想、有施想、是れを三礙と爲す。是れを世俗の布施と爲す。何をもつての故に世俗の布施と名づくるや。世俗を離れる能わず亦た世俗の事を出でざるが故をもつて是れを世俗の布施と爲す。何をか道施と爲すや。三事の淨をもつての故に。何をか三と爲すや。菩薩は布施のとき自らを見ず亦た受くる者を見ず其の報を望まず、是れを菩薩の三事淨と爲すなり。^⑧

こゝでは、布施は世俗施と道施とに分けられ、道施が無執着の故に「三事淨」すなわち「三輪清淨」の布施であることが説かれている。空性にもとづく布施が布施波羅蜜であるということは、こゝでは波羅蜜が「空」と同義になつていと理解されるのであり、こゝにおいて般若經的布施の理解が明らかに示されているといつてよいと思われる。

Ⅱ

小品系の六波羅蜜が、菩薩の誓願思想と結合されて説かれていることは前章において述べた通りである。この、『道行般若經』『恒竭優婆夷品』に示される五つの誓願は小品系に至って、三十の誓願として拡大されている。

内容自体については、すでに多方面から研究されているので、こゝでは問題を六波羅蜜と誓願との關係に絞つて考察を進めてゆきたいと思う。

まず『放光般若經』『夢中行品第五十九』に説かれる誓願の要約を列挙し、六波羅蜜との対応を見ると次のごとくである。^⑨

(1) 資具自然——布施波羅蜜

般若經における六波羅蜜説

- | | |
|-----|-------------|
| (2) | 無犯十惡——持戒波羅蜜 |
| (3) | 慈心無害——忍辱波羅蜜 |
| (4) | 精進無怠——精進波羅蜜 |
| (5) | 無有亂志——禪定波羅蜜 |
| (6) | 無有邪見——般若波羅蜜 |
| (7) | 無邪定聚 |
| (8) | 無三惡趣 |
| (9) | 地平如掌 |
- 六波羅蜜全部
- ………
- (20) 生死解脫

このように、小品系の誓願説と異り小品系では最初の六願については布施波羅蜜から般若波羅蜜までの各波羅蜜を順次に配当させ、それ以降の願はすべて六波羅蜜全部と対応させるという極めて整然とした形式で説かれている。因みに最初の六願について『放光般若經』は次のごとく説いている。

菩薩は檀波羅蜜を行ずる時、若し衆生に飢渴する者、衣の不蓋形にして孤貧窮厄し自ら存す能わざる者を見れば当に大哀願を起こすべし。我れ阿耨多羅三耶三菩阿惟三仏を得る時、我が境界に是の輩、困苦の類有ることなからしめん。我が仏土に衣服飲食の具を所有して四天上の如く、忉利天第六天王の如く飲食衣服の所有を自然なからしめん。須菩提よ、菩薩は是の行を作して便ち檀波羅蜜を具足せん。復た次に須菩提よ、菩薩は尸波

羅蜜を行じ、若し衆生有りて慈の意なく衆の命を殘殺し邪見疑網にして十惡を犯す者を見、短命多病にして威
少なく、醜にして顔色なく形殘羸劣にして極めて下賤の者有るを見れば大悲の意を起こすべし。我れ尸波羅蜜
を奉行して我れ仏を得ん時、我が境内に是の輩の有ることなからしめん。菩薩は是の如く戒を具足して疾やか
に久しからずして阿惟三仏を得ん。須菩提よ、菩薩は尸波羅蜜を行ずる時、若し衆生に瞋恚の意有りて捶杖刀
矛瓦石をもちて相加え、たがいに傷殺する者を見れば大願を起こして言わく。我れ当に忍を行じて仏を得るに
至るの時、我が境内に是の輩惡事の者の有ることなからしめん。我が国土中の一切の衆生をして皆同じく慈意
和志し、相視て父の如く母の如く、若しは兄、若しは弟相向いて害することなからしめん。菩薩は是の行を作
して忍を具足し疾やかに久しからずして阿惟三仏を得ん。復た次に須菩提よ、菩薩は惟逮波羅蜜を行ずる時若
し衆生の三乘法において相を起こし、懈怠にして無精進の者を見れば復た大願を起こすべし。我れ当に自ら勉
めて精進して懈なかるべし。我れ仏を得ん時、我が国中の衆生をして精進して三乘法を各度脱得さしめん。菩
薩は是の如く精進を具足して疾やかに久しからずして阿惟三仏を得ん。復た次に須菩提よ、菩薩は禪波羅蜜を
行ずる時、若し衆生の五蓋の事、一に婬妹、二に瞋恚、三に睡眠、四に調戲、五に疑網を行じ、四禪を離れ四
空定を離れるを見れば大意願を起こすべし。我れ当に常に禪波羅蜜を行じ衆生を教化して仏国土を淨めん。我
れ仏を得ん時、我が国土の一切の衆生をして乱志の者なからしめん。菩薩は是の如く禪を具足して疾やかに久
しからずして阿惟三仏を得ん。復た次に須菩提よ、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、若し衆生に惡を犯す者、若
しは俗、若しは道の正見を離るゝ者、無道の事を行ずる者、報無しと言う者、断と言う者、衆生有りと言う者、
是れを作すを見れば大願を起こして言わく。我れ当に六波羅蜜を勤力行して仏国土を淨め、衆生を教化すべし。
我れ作仏の時、我が国土中をして是の輩の邪見の事有ることなからしめん。菩薩は是の如く般若波羅蜜を具足

して疾やかに薩云然に近づかん。^②

こゝで注目されるのは、小品般若經のものに比して大品系般若經のものは化他行において六波羅蜜を具足するということが強調されるのであり、さらにこれが「淨仏国土」という言葉で表明されている点である。これはまた「建立品第八十二」にも同様にみいだすことができるのであり、すなわちこゝでは、

自ら六波羅蜜を行じ、亦た人に勸進して六度を行ぜしむ。是の功德を持ちて衆生と共に仏國淨を求む。^③

と述べられ、続いて、七宝嚴淨、常有天樂、常有天香、百味飲食、身体香潔、恒受快樂、不離禪定の七つの誓願が説かれている。これは内容的にさきの「夢中行品」に説かれる誓願と同等のものと見做してよいものである。

この七願の各々は六波羅蜜の各支とは対応させられていないのであるが、最初に六波羅蜜を行じて衆生と共に仏國淨を求むと語られる点から、七願のすべてが六波羅蜜に対応させられていると理解してよいものと考えられる。このように大品系においては、

菩薩は衆生の為の故に大誓願を起こし言わく。我れ、自ら六波羅蜜を具足し、亦た当に人に教えて六波羅蜜を具足せしめん。^④

あるいはまた、

我れ当に六波羅蜜を行じて衆生に教授し、仏國土を淨めん。^⑤

と説かれるように、六波羅蜜、誓願、淨仏國土の三者が緊密に結合されて示されるのである。

大品系般若經における誓願と六波羅蜜との関係について注意すると、まず誓願をおこしてその完成のために六波羅蜜を行ずるという表現はまれであり、むしろ逆に六波羅蜜を行ずるときにそれぞれの誓願をおこすべきであるという表現が圧倒的に多いことが確かめられる。

大品系般若経によって創唱されるにいたった浄仏国土思想については、「放光般若経等はむしろ他方浄土説に對立して浄仏国土を唱導したのではないかと考えられる。」^③とされるごとく、とくに西方浄土説を意識した新しい主張であったと理解されるのであるが、この西方浄土説に立つ浄土系經典では、いうまでもなく、まず誓願をおこしてその成就のために六波羅蜜を實踐するという説き方がなされるのであり、六波羅蜜と誓願との位置づけにおいて般若経と浄土系經典とはその立場が若干異っていると思われる。

いずれにしても大品系般若経においては六波羅蜜が誓願と結合したときに一層、化他行としての立場を強めることになったとみられるのであり、「浄仏国土」はその必然的な展開であったと理解される。

Ⅲ

大品系般若経における六波羅蜜の特色として、菩薩の誓願との結合とともに、「六度相摂」を挙げることができ

る。
誓願説は六波羅蜜と菩薩の誓願という二つの思想が結合して成立したものであるが、六度相摂は六波羅蜜それ自体の発展的形態として注目されるものである。

六度相摂とは、六波羅蜜中のひとつの波羅蜜を行ずることによって他の五つの波羅蜜が充足されるという思想であり、たとえば布施波羅蜜を完成した場合、それはそのまゝ他の五つの波羅蜜のすべてを完成したことにもなるということ説くものである。

ところで、六波羅蜜の観点から大品系般若経における信仰形態を見ると、これを大きく三種に分類することが可能である。すなわち

- (1) 般若波羅蜜を中心とする自利利他の両面を含む六波羅蜜の實踐。

(2) 『般若波羅蜜經』という經典受持の信仰。

(3) 六度相摂の思想を背景とする各波羅蜜の実踐。

の三種である。

まず、(1)の六波羅蜜の実踐とは常啼菩薩や曇無竭菩薩の行によって示される^⑤ごとき激しい実践であり、さらにそれは三阿僧祇劫という長大な時間的経移のもとに修されねばならぬものである。

釈迦菩薩はこれを悉く完成して成仏に到達したとされるのであるが、いわゆる善男子善女人と呼ばれるところの在家の凡夫菩薩達においては彼等の行がいかに激しいものであってもそれは成仏にはほど遠いものである。そこに、(2)の經典受持の信仰が現れた理由があると考えられる。般若波羅蜜を書写し、経卷を持して他人にも勧めて写経をさせ、これを読誦して学び、花香瓔珞絵蓋幡等をもって供養すれば、その福德は塔供養よりもはるかに大きいと説かれる經典受持の信仰は、早くも『道行般若経』「功德品第三」に現れている^⑥。大品系般若経においてもこの信仰は引き継がれ、『放光般若経』「守空品第三十三」「供養品第三十四」「持品第三十五」等、その他の品においても經典受持の功德の大きいことが強調され、その信仰が勧められている。

これについては、当時盛んであった仏塔信仰に対抗する意味から經典供養が般若経徒の間に起こったものと考えられているのである^⑦。一方、般若経自体としては、最初はおそらく般若波羅蜜の実踐ということが中心課題であったはずであるが、しかし、般若波羅蜜の実踐が容易でないために明呪や經典受持という平易な信仰に変っていったものとも理解されているのである^⑧。このことは般若経受持の菩薩達が在家の菩薩であったことも密接な関係を持っていると考えられるが、六度相摂の思想もこれと同様に、六波羅蜜のすべてを実践することの不可能な在家菩薩の信仰と関連を持つと思われる。

『放光般若經』「六度相摂品第六十九」に説かれる六度相摂は次のような構成になっている。

布施の時、尸波羅蜜を摂す。布施の時、羼波羅蜜を摂す。布施の時、惟速波羅蜜を摂す。布施の時、禪波羅蜜を摂す。布施の時、般若波羅蜜を摂す。

戒に住して布施を摂取す。戒に住して羼提波羅蜜を摂取す。戒に住して惟速波羅蜜を摂取す。尸波羅蜜に住して般若波羅蜜を摂取す。

忍に住して檀波羅蜜を摂取す。忍に住して尸波羅蜜を摂取す。忍に住して惟速波羅蜜を摂取す。忍に住して禪波羅蜜を摂取す。忍に住して般若波羅蜜を摂取す。

精進に住して檀波羅蜜を摂取す。精進に住して尸波羅蜜を摂取す。精進に住して羼波羅蜜を摂取す。精進に住して禪波羅蜜を摂取す。精進に住して般若波羅蜜を摂取す。

禪に住して檀波羅蜜を摂取す。禪に住して尸波羅蜜を摂取す。禪に住して羼波羅蜜を摂取す。禪に住して惟速波羅蜜を摂取す。禪に住して般若波羅蜜を摂取す。

般若波羅蜜に住して檀波羅蜜を摂取す。般若波羅蜜に住して尸波羅蜜を摂取す。般若波羅蜜に住して羼波羅蜜を摂取す。般若波羅蜜に住して惟速波羅蜜を摂取す。般若波羅蜜に住して禪波羅蜜を摂取す。

この、六度相摂が完全な形で現れる「六度相摂品」は般若經の中で成立の新しい部分であるが、三枝充恵博士はこの『放光般若經』の六度相摂がさらに拡大されて『大般若經』の最後の部分、すなわち「第十一会・布施波羅蜜多分」から、「第十六会・般若波羅蜜多分」に至る六会が成立したと見ておられる。^④

いずれにしても六度相摂の完成は「六度相摂品」において見られるわけであるが、またこれ以前の段階において、相摂を断片的にみいだすことができ、相摂思想の発展段階をある程度窺うことが可能である。すなわち、『放光般若

『若經』では「問僧那品第十六」において、

菩薩の布施は薩云若に応じ、羅漢辟支仏地を求めず。是の為に菩薩は般若波羅蜜を行じ布施のとき尸波羅蜜を習う。復た次に舍利仏よ、菩薩は布施の時、薩云若の念を作し、法に應ずる所を行ず。是れが為に摩波羅蜜を習うなり。^④

と説き、これに続いて以下、精進、禪定、般若の各波羅蜜を布施が具足することを説いている。次に、戒波羅蜜を行ずるときについても、布施、忍辱、精進、禪定、般若の各波羅蜜が具足されることが列記されている。このようにこゝでは布施及び戒波羅蜜について、他の波羅蜜を具足することが示されているのである。また、「無形品第八十一」においても、布施波羅蜜について、それが忍辱、精進、禪定、般若の各波羅蜜を具足することが述べられている。^⑤

このような相摂の断片を諸所に見るとき、相摂は最初から完全な形で説かれたものではなく、これらの断片的なものが成長して「六度相摂品」に示される形式となったと考えられる。また、この相摂がどのような形から発展したかという問題については、小品系たる『道行般若經』『不可盡品第二十六』においてその基本形が現れていると拙稿は考えるものである。すなわち、「不可盡品」においては般若波羅蜜が他の波羅蜜を具足することを説いている。

若し菩薩有りて仏道を得んとはつする者は、當に般若波羅蜜を行ずべし。菩薩は般若波羅蜜を行じて檀波羅蜜を行ずと為すなり。尸波羅蜜を行ずることを具足するも亦た爾り。亦た驢提波羅蜜を行ずることも爾り。亦た惟速波羅蜜を行ずることも爾り。亦た禪波羅蜜を行ずることも爾り。^⑥

この説の根本に予想されるのは、般若波羅蜜を他の五波羅蜜の指導原理とする般若經の中心思想である。それを

端的に表明する「五波羅蜜は般若波羅蜜の中より生ず」^④という表現は次の段階においてたゞちに、般若波羅蜜が他の五波羅蜜を具足するという表現に発展したであろう。すなわち、「五波羅蜜は般若波羅蜜の中より生ず」という場合、般若波羅蜜は他の五波羅蜜のすべてを含むものとして把握されているからである。そして、形式面から見た場合、相摂の断片がもっとも早く現れるのはこの「不可盡品」の般若波羅蜜に関する記述においてである。

大品系たる『放光般若経』では、「無倚相品第七十六」において般若波羅蜜のみをとりあげてそれが他の波羅蜜を摂することを説いている^⑤。

すなわち、これらの般若波羅蜜についての記述が『放光般若経』の「問僧那品」や「無形品」における布施波羅蜜あるいは戒波羅蜜についての記述へと展開し、それがさらに他の波羅蜜にも拡大されて現在の「六度相摂品」にまとめられたと考えられる。般若波羅蜜の中に他の五つの波羅蜜が含まれるということは、言い換えればひとつの波羅蜜の中に他の五つの波羅蜜が含まれるということであり、これが拡大解釈されて般若波羅蜜以外の各波羅蜜についてもあてはめられたというのが拙稿の六度相摂成立に関する結論である。

六度相摂は、六種の各波羅蜜がいわば円環的な関係にあつて緊密に一体化されたものであるが、同時に在家の菩薩達にとっては彼等の信仰に即した新しい六波羅蜜の実践思想となったであろう。大品系般若経における六波羅蜜思想は六度相摂によって新たな展開をみせているといつてよいと思われる。

注

- ① 平川彰『六波羅蜜の展開』(『印仏研』第二一卷第二号)
② 平川彰博士は、六波羅蜜の中から般若波羅蜜が選ばれたら『般若経』が成立したと見ておられる。平川彰前掲書、及び『般若経と六波羅蜜経』(『印仏研』第一九巻第

二号)。これに対して三枝充憲博士は般若波羅蜜の中から他の五波羅蜜が生み出され、六波羅蜜としてまとめられたと見ておられる(三枝充憲『般若経の真理』五〇頁)。

③ 八千頌般若梵本と漢訳諸本を比較すると、梵本は十世紀の施護訳『仏母般若経』ともっともよく一致することが知られ、支婁迦讖訳『道行般若経』、支謙訳『大明度無極経』などの古訳に見られない新しい要素が『梵本』に備わっていることが認められる。

④ 梶芳光運博士は、「難問品第二」にはすでに発達段階が認められるのであり、純粹な『原始般若経』に相当するのは「道行品第一」のみと見ておられる（梶芳光運『原始般若経の研究』五五五頁）。また、梶山雄一博士は「道行品」から「累教品」までをひとまとめにして古形と見ておられる（梶山雄一『般若経』中公新書、八一頁）。しかし、二五品という長さのものが一時期に出現成立したとは考えがたく、やはりこの二五品の間には数回の発展段階があったと考えるのが自然であると思われる。

- ⑤ 梶芳光運前掲書五五三頁—五五五頁
- ⑥ 大正八卷四三一b
- ⑦ 大正八卷四三四b
- ⑧ 大正八卷四三六b
- ⑨ 大正八卷四三四b
- ⑩ 大正八卷四四〇c
- ⑪ 大正八卷四六二a
- ⑫ 大正八卷四六九a

- ⑬ 大正八卷四六五b
- ⑭ 大正八卷四五六c

⑮ この対応で注意すべきことは、六波羅蜜に五願が対応させられているものでないことである。すなわち、小品系般若経の漢訳諸本を比較するとき、五願が『般若経』の中に取り入れられ、波羅蜜がそれに配されることによって順次、誓願説が般若経化されていったことが知られるのである。これについては、岸一英氏の『般若経における誓願説』（『仏教大學大學院研究紀要』第五号）を参照されたい。

- ⑯ 岸一英前掲書一六二頁—一九三頁。
- ⑰ 望月信亨『浄土教の起源及発達』四四七頁。
- ⑱ 大正二七卷八九二ab

⑲ 南伝四阿合に説かれる波羅蜜は Majjhima Nikaya あるいは Khuddaka Nikaya の中の Apadana ちなわち『譬喻』においてみい出すことができ、とくに『遠き因縁物語』（南伝二六卷）に説かれる十波羅蜜 (dasā-pāramīyo) は有名である。南伝の波羅蜜説と北伝の波羅蜜説についてその関連をみると、まず、修行期間については北伝が三阿僧祇劫を説くのに対して、南伝は四阿僧祇劫を説いている。また両者は順序内容ともに異り、南伝の出離、諦、決定、慈、捨の五波羅蜜は北伝にはなく、一方、北伝の禅波羅蜜は南伝には含まれていないこ

とが知られる。これらの点からも波羅蜜説が一定していなかったことが明らかである。

- ②① 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』一九八頁。また、中村元博士は『金剛般若経』の成立を「大乘」と「小乗」の両觀念の対立が生まれる以前とみておられる。中村元・紀野一義訳註『般若心経・金剛般若経』一九五頁―二〇〇頁(岩波文庫)。

- ②② 干潟竜祥 *Suvikrantarīkrami-Paripiccha prajña paramitā Sūtra* edited. with an Introductory Essay.

- ②③ この大品系般若経の成立過程については主として、干潟竜祥前掲書 Table. V. pedigree of Mahā Prajñā paramitā Sūtras を参照しよう。

- ②④ 山田竜城『大乘仏教成立論序説』二〇六頁。なお、同書は『般若経』が「仏伝文学」の影響を受けて成立したとみている。前掲書二〇八頁。因みに「仏伝文学」は六波羅蜜の源流とみられているものである。これについては、平川彰前掲書に詳しく論じられている。

- ②⑤ 大正八巻一b

- ②⑥ 大正八巻二二c

- ②⑦ 大正八巻二二c―二三a

- ②⑧ 大正八巻三七b

- ②⑨ 大正八巻九二a―九三c。なお、この要約名については『国訳一切経』の、椎尾弁匡訳『般若部』三、二五九

般若経における六波羅蜜説

頁一二七二頁に脚註として示されている。

- ②⑩ 大正八巻九二b c

- ②⑪ 大正八巻一三六a

- ②⑫ 大正八巻二〇a

- ②⑬ 大正八巻五b

- ②⑭ 小沢勇貫『仏教論叢』創刊号三六頁―三八頁。

- ②⑮ たとえば、『大阿弥陀経』では、法蔵菩薩が世自在王仏のもとで授記を得、誓願を立て、その成就を目指して六波羅蜜を行じたと説かれ、また『阿閼仏国経』では阿閼菩薩が大目如来のもとで誓願を立て、六波羅蜜を行じたことが説かれている。形式面からいえば、「般若経」では波羅蜜行が誓願に先行する表現をとるのに対して「浄土系経典」はその逆となっている。このことは誓願説が「浄土系経典」から「般若経」に取り入れられて「般若経化」されていることを示すものと理解される。

- ②⑯ 『道行般若経』では「薩陀波倫菩薩品第二十八」「曇無竭菩薩品第二十九」にその実践が示されている。

- ②⑰ 大正八巻四三二c

- ②⑱ 静谷正雄前掲書二八六頁、及び平川彰『初期大乘仏教の研究』五七三頁―五七六頁。

- ②⑲ 平川彰『般若経と六波羅蜜経』(『印仏研』第十九巻第二号)。

- ②⑳ 大正八巻一〇六c―一〇八c

④① 三枝充惠前掲書五〇頁。

④② 大正八卷二〇a

④③ 大正八卷一三四c—一三五a

④④ 大正八卷四六九c

④⑤ 大正八卷四三四b

④⑥ 大正八卷一二二b c

(文学研究科博士後期課程二回生 仏教学専攻)